

雉はなぜ射られたか

松田 浩

— アメワカヒコ神話の想像力と言語遊戯と —

一 はじめに

言語遊戯が神話的想像力に大きく参与することはよく知られている。例えば、靈妙な稲田の神格化であるクシナダヒメが湯津爪櫛と化すことには、「クシ（奇し／櫛）」の同音の連想があるいはまたスクナヒコナが粟の茎に弾かれて常世郷へと渡ったのが淡島での出来事であったことにも、「アハ（粟／淡）」の同音の連想が働いている。同音・類音の連想によって生成される神話は、地名起源譚などを含めれば枚挙に暇がない。音声による連想法が神話生成に参与することは、神話の初発が語りや神謡に求められることを鑑みれば当然のこととも言いうる。しかし記紀の神話を考える際には、それらが既に文字テキストとして成立していることも看過できない。神話が文字によって書かれる時代にあつては、神話を構成する文字そのもののへの知の働きを含めて、神話的想像力に参与する言語遊戯を考えてみる必要がある。

本稿では如上の問題意識を以て、アメワカヒコ神話における天よりの使者である「雉」の位置づけについての考察を試みた

い。なお、以下に『日本書紀』「神代下・第九段正文」の天稚彦神話（A）を挙げ、考察にあたって傍線を付した①～⑤のプロットに関しては記紀に共有されるため、『古事記』の神話（B）をも含めて大きくアメワカヒコ反矢神話と捉えておく。

A 高皇産靈尊、賜天稚彦天鹿兒弓及天羽羽矢以遣之。此神亦不忠誠也。① 到即娶天照國玉之女子下照姫、亦名高姫、亦名稚國玉。因留住之曰、「吾亦欲娶葦原中國」、遂不復命。是時、高皇産靈尊、怪其久不來報、乃遣無名雉伺之。其雉飛降、止於天稚彦門前所植湯津杜木之杪、② 時天探女見、而謂天稚彦曰、「奇鳥來居杜杪」。③ 天稚彦、乃取高皇産靈尊所賜天鹿兒弓・天羽羽矢、射雉斃之。④ 其矢洞達雉胸、而至高皇産靈尊之座前也。時高皇産靈尊、見其矢曰、「是矢、則昔我賜天稚彦之矢也。血、染其矢」。蓋与國神相戰而然歟。⑤ 於是、取矢還投下之。其矢落下、則中天稚彦之胸上。于時、天稚彦、新嘗休臥之時也。中矢立死。此、世人所謂「反矢可畏」之緣也。

高天原から降った天稚彦は顕國玉の娘・下照姫を娶り、自ら

が葦原中国を統治しようと考える——^①。「雉」が高天原よりの使者として降り来るが天稚彦に射られる——^{②③}。その矢は「雉」の胸を貫き通って高天原へと至り、反矢によって天稚彦は殺されることとなる——^{④⑤}。所謂ニムロッドの反矢の話型を持つ神話であり、また「彼は天の使者でありながら天を射て自滅」したのだとも説かれるものである。ただし、彼は「天」ではなく「雉」を射たのであり、「雉」は矢に射られることによって反矢のプロットを引き起こす装置として機能しているのである。ではなぜ「雉」はそうした機能を担い得たのか。そして抑も、「雉」はなぜ高天原からの使者として選ばれたのであろうか。本稿ではこの二つの要素が繋がりに、「雉」が「矢」に射られるという発想にこそ文字の言語遊戯による神話的想像力が働いていると見るのだが、まずは抑もの疑問、なぜ天からの使者が「雉」であつたのかという問題から読み解いていきたい。

二 雉 —天よりの使者—

使者の鳥はなぜ「雉」であつたのか。西郷信綱は「なぜ雉を使に選んだかはよく分らぬ」との慎重な態度を示しつつも、一案として諺「雉の頓使」からの発想で使者が「雉」とされた可能性を説き、近年でも新編全集「古事記」などがこれを踏襲している。なるほど確かに『古事記』(B)では、

B 取^⑥其矢^⑦、自其矢穴^⑧衝返^⑨下者、中^⑩天若日子^⑪寢朝床之高胸坂^⑫一以死。^⑬〔此「還矢」之本也。〕^⑭亦其雉不^⑮還。故^⑯於^⑰今諺曰「雉之頓使」本是也。

とあるように、諺「雉の頓使」の本縁を説くかたちでアメワカ

ヒコ反矢神話が閉じられている——B^⑦。とはいえ、B伝がひとたび還矢のプロットを述べきった後に、「亦、其の雉還らず」とわざわざ断りを入れた上で「雉の頓使」を記述している点は看過できない。一方のA伝においては「雉の頓使」は記されることなく、「反矢畏るべし」の本縁としてこの反矢神話が閉じられており——A^⑥、更に『日本書紀』「神代下・第九段・一書第一」(C)においても「雉の頓使」に関する記述はなく、

C 因^①還投^②之。即其矢落下中^③于天稚彦之高胸^④。因以立死。^⑤此世人所謂「返矢可畏」縁也。

と「返矢畏るべし」によって閉じられるのであつて——C^⑥、寧ろ反矢の本縁が三者に共有されているのである——ABC^⑥。であれば、ABC伝が共有するアメワカヒコ反矢神話のプロットにおいて、諺「雉の頓使」は必須のものではなく、天よりの使者である「雉」が射られて天に帰って復命することができなくなつたという内容が、既に本縁を失つていた諺「雉の頓使」を事後的に引き寄せたのだと考えるのが穏当であらう。なお、『日本書紀』「神代下・第九段・一書第六」(D)では、

D 乃遣^①無名雄雉^②往候之。此雉降來因^③見粟田^④・豆田^⑤、則留而不^⑥返。^⑦此世所謂「雉頓使」縁也。^⑧故復遣^⑨無名雌雉^⑩。此鳥下來爲^⑪天稚彦^⑫所射、中^⑬其矢^⑭、而上^⑮報云々。

とあるように、「雉」は矢に射られてもなお復命をする——D^③。その後のことは「云々」と省略されているので、やはり他のヴァリアントと同じくアメワカヒコが反矢によって殺されたということなのであろうが、注目されるのは矢に射られた雉が天に戻

るというD伝では、「雉の頓使」の本縁を説くために、矢に射られた雉とは別に、使いに行つたまま戻らなかつたという、もう一羽の雉（無名雄雉）が要請されることである。D^⑧。ここではアメワカヒコ反矢神話に共有される①～⑤のプロットから逸脱したもの、つまりプロットの相互連結に関わらないものとして「雉の頓使」は記述されているのである。こうしたD伝の存在もアメワカヒコ反矢神話において「雉の頓使」が事後的なものであつたことの左証となろう。このようにヴァリアントを眺めてみれば、「雉」が天よりの使者として選ばれた発想の源泉を「雉の頓使」に求めることはできない。

アメワカヒコのもとに「雉」が使われたことには、他の理由を見なければならぬ。なお、新編全集『日本書紀』頭注が、当該の天より降る「雉」の使者について、「雉は使者としてよく登場する鳥」と記していることは興味深い。我が国の上代文献において「雉」が天よりの使者となる事例は、祥瑞としての「白雉」以外に見いだすことは難しいものの、漢籍に目を向ければ、天からの使者たる「雉」を見ることが出来る。

『漢書』『五行志』には、宣帝のもとへ飛来して雉いた雉の記事が載せられている。雉が飛び来て集まり、雉くことは、天が人君を「謹告」することを意味するといふ。

鴻嘉二年三月、博士行^二大射礼^一、^ア有^下飛雉^{（とじはり）}集^{（とじ）}于庭^{（とじ）}、

歴^レ階登^レ堂^{（とじ）}而^{（とじ）}雉^{（とじ）}。…（中略）…時、大司馬車騎將軍王音^{（とじ）}待詔寵等上言、「天地之氣以類相応、謹^{（とじ）}告人君^{（とじ）}、甚微而著。雉者聰察、先聞^{（とじ）}雷聲^{（とじ）}。故、月令^{（とじ）}以紀^{（とじ）}氣。經載^{（とじ）}高宗雉雉之異^{（とじ）}。以明^{（とじ）}転禍為^{（とじ）}福之驗^{（とじ）}。今、雉以^{（とじ）}

博士行^レ礼之日、大衆聚會飛^{（とじ）}集^{（とじ）}于庭^{（とじ）}、歴^{（とじ）}階登^{（とじ）}堂^{（とじ）}、万衆睢睢。驚怪連^{（とじ）}日。徑^{（とじ）}歴^{（とじ）}三公之府・太常・宗正、典^{（とじ）}宗廟・骨肉之官、然後、入^{（とじ）}宮。其宿留告^{（とじ）}曉人^{（とじ）}、具備深切、雖^{（とじ）}入道相戒^{（とじ）}、何以過^{（とじ）}是^{（とじ）}。

博士官で大射の礼を行つた時に、雉が飛び来たつて庭に集まり、階を点々と堂まで登つてから雉いた^ア。この出来事は、宣帝の臣下によつて、『書経』の武丁の故事を踏まえつつ以下のよゝうに奏言される。すなわち、天地の精気は類を以て相い応じ、人君の過ちを謹め告げることが、甚だ微かながら現れる。雉といふものは、よく聴いて真実を判断する力に富んでおり、雷声も真つ先に聞きつける能力がある。その雉がここに飛来して留まり人を告げ曉すさまは、非常に行き届いており、人の道を戒めるのにこれ以上のものはない。と。『五行志』の記述に拠れば、「雉」は人君に過失がある際に、飛び来たり、留まり、鳴き、それによつて天よりの謹告を伝えるものであつた。

アメワカヒコは地上平撥を指令され、地上平定のための呪具、天鹿兎弓と天羽羽矢とを授けられて天下つた。しかし、彼は地上を支配する靈力の神格化である「顕國王」の娘・下照姫との聖婚をなし、その靈力を自らに取り入れて「吾、亦た葦原中国を馭さむ」とする。ここにおいてアメワカヒコは、葦原中国の支配者の位置に立つたのであるが、これは明らかに天（高天原）の意志に背く地上支配である。アメワカヒコのもとに天よりの謹告を伝える使者として「雉」が派遣されることは、『漢書』『五行志』の宣帝の故事と等しい。勿論、『五行志』

の説くように、その「雉の譚告」を正しく察知し、行いを改めるならば災異は訪れず、返って天の意志を知り正しき政治を行うことができるのであるが――エ、アメワカヒコの場合はそうではなかった。「雉の譚告」はアマノサグメによって振じ曲げられ、彼には届かなかったのである。

アメワカヒコ反矢神話において、天よりの使者としての「雉」が想起されたことは、『漢書』『五行志』の宣帝や『書経』の武丁の故事を以て了解することができる。とはいえ、右に見た「雉の譚告（雉雉の異）」の故事は反矢説話を伴うものではない。アメワカヒコ反矢神話の「雉」を「雉の譚告」として了解した上でなお、なぜここに反矢の語型を引き出す想像力が働いたのか、という問題が残されることとなる。本稿ではここに、文字の言語遊戯による発想方法という可能性を考えてみたい。

三 文字分解の知と神話的想像力

結論を先に言えば、「雉」が矢に射られるという発想は、「雉」という文字そのもののへの知の働き――文字分解の言語遊戯――によってなされたのであろう。「雉」字をその構成要素に分解すると、「矢」と「隹」という要素が析出される。「雉」という文字が持つ二つの構成要素それぞれの意味の結合として、「雉（矢・隹）」という字はあるのであり、その「雉」字によって表象される鳥とは「矢」に射られる「隹」であるとの想像が働き、天よりの譚告の使者である「雉」という「隹」が「矢」に射られるという形で、反矢の語型が喚起せしめられた、ということである。一つの文字をその構成要素に分解し、それぞれを意味化して

から元の字に解釈を加えるという言語遊戯は、『万葉集』の中にも見ることができよう。

山葉 追出月 端々 妹見鶴 及 恋 (11・246一)

右の歌の文字列では、ミカツキを「出月」と表現する。「出月」とは、「胼」字を二つの要素「月・出」に分解したものである。ここでは「胼」字を「月」が「出」現すると分解して解釈を施し、その「胼」が山の端に沿ってつはつに見え隠れしつつ昇り出てくる姿を「出・月」によって表現している。また、

獻 忍壁皇子 歌一首（詠 仙人形）
常之倍尔 夏冬往哉 裘 扇不放 山住人 (9・268二)

の歌の文字列では、「仙」字を「山・人」に拆字し、「山」に住む「人」として解釈を施す。こうした文字分解の言語遊戯として最もよく知られる例は、「嵐」字を分解した「山下風」の文字列であらう。

霞立 春日之里 梅花 山下風尔 落許須莫湯目 (8・243七)

足松木乃 山下風波 雖不吹 君無夕者 予寒毛 (10・235〇)

「山下風」の文字列は、いずれもヤマノアラシと訓ぜられるものである。ここでは「嵐」字を拆字して、「山」とその下に位置する「風」の要素とに分解し、山から吹き下ろす荒涼たる風をヤマノアラシとして解釈するという知が働いている。周知のように「嵐」字分解の言語遊戯は、『古今集』にも引き継がれる。吹くからに秋の草木のしほるれば むべ山風をあらしといふらむ (『古今集』・秋下・249)

右の歌では、下句「むべ山風をあらしといふらむ」とあるように、「嵐」字に「山」から吹き下ろす「風」、即ちアラシという字義——言語遊戯の中で見出した漢字生成の由来——を見出しているのである。「嵐」字にアラシの意味を見出すのは、我々から見れば至極当然のことのように見えるが、漢語「嵐」は『説文解字』に「山気蒸潤也」とあるように、山の清らかな霧の意であって、アラシの意味はない。だが勿論、「嵐」字に対してこうした解釈を施すのは、右の例に限ったことではなく、『倭名鈔』にも「嵐 山下出風也。阿良之」との「嵐」字分解による解釈方法が見える。漢字分解によって新たに生み出された文字生成の由来が、字書に説かれるほどに一般化した例である。なお、こうした言語遊戯は日本漢詩においては「字訓詩」と呼ばれるが、その名称が「字訓」、即ち字の意義を解き明かすことに拠っていることには注意してよいであろう。¹⁰⁾

四 神話的想像力へ

前節に文字を分解して解釈を施すという言語遊戯が、時には本来の字義にはない新たな意味を生成するさまを概観した。ただし注意せねばならないのは、文字解釈の知を働かせる書き手にとっては、分析対象たる文字とその文字によって表象される事物そのものとの結びつきは所与のものとして存在するという点である。であれば、文字を解析する知のありようは、その漢字で意味される事物の根源を解き明かすことともなるのである。例えばアラシは「嵐」字であり、すなわち山から吹き下ろす風であるという言語遊戯的な解釈が、アラシの本質であると

『倭名鈔』で説かれるように。

こうした事物の本質を解き明かす漢字解釈の知を想定することとは、当時の文字に対する認識・思想をあわせて考えることで、漢字テキストとしての日本神話のあり方を考える一つの方法ともなる。表意文字として東アジア漢字文化圏に流通する世界言語たる文字、漢字¹¹⁾。その文字の起源論はこの文化圏の一地方である日本においても共有される。『尚書』序（孔安国）が、

古者、伏羲氏之王天下¹²⁾一也、始畫¹³⁾八卦¹⁴⁾、造¹⁵⁾書契¹⁶⁾以代¹⁷⁾結繩之政¹⁸⁾。由¹⁹⁾是文籍生焉。

と述べるように、伏羲が黄河から現れた河図によって宇宙の根本原理を象る易の八卦を初めて書き、これを基にして書契が造られて文籍は生まれる。つまり文字とは自然世界から人間に与えられた贈与に起源するものであり、その文字が織り成す「文籍（文章）」が自然世界・宇宙の法則を象るものである。こうした文字起源の神秘思想が、いかに深く我が国上代の知識層に根付いていたかは当時の対策文などから知ることが出来る。文字の神秘思想が信ぜられた時代の中にあつて、神話を文字で書くのである。神話とは、それを語り・書く者にとつての今における人間世界を支える根源・摂理を解くものである。これを惟みれば、神話の書き手にとつては、神話という文籍を構成する文字の根源的意味——生成の由来——を解き明かすことは、書き手が生きる世界を支える宇宙の根本摂理へと近づく行為でもあつたろう。その意味では、文字解釈の言語遊戯は、現代の我々の「遊戯」という認識を越えて、神秘世界を垣間見るための能動的な知の働きとして捉えられるべきものとなる。

雉はなぜ射られたのか。漢籍の知識に由来する「雉」の引用だけでは神話とはならない。この静的な知識が、キギシを象る「雉」字の本質を解説すること、すなわちキギシに隠された宇宙の根本摂理を解き明かす動的な知の働きと繋がるところで神話は生成されるのである。「雉」とは「矢」＋「佳」であるという遊びが、反矢の類型と「謹告の雉」とを繋ぐ神話的想像力として働いているのである。

神話が語られるだけでなく、文字で書かれる時代にあつては、時には神話そのものを形作る文字そのものへの根源的な問いかけ・知の働きが、神話的想像力の新たな源泉として現れてくる。記紀や風土記といったテキストも、そうした時代の文字テキストとして捉えてゆく必要があるのである。

(1) 『日本書紀』の訓注は省略し、これをルビとして付した。

(2) ニムロッドの矢の話型については、金関丈夫が以下のようについている。メソポタミア「地方の民間説話では、ニムロッドは神を目がけて天上に矢を射る。その矢は神の手で地上に投げ返されて、ニムロッドの胸板を貫く。…(中略)…要するに、神あるいは神人を射た矢が、返つてその射手に向かうという、一説話の根源となっている。」(ニムロッドの矢)〔新編 木馬と石牛 岩波文庫・平成8年〕

(3) 松本信広「日の神の子孫」(『日本神話の研究』東洋文庫・昭和46年)

(4) 西郷信綱『古事記注釈 二』(平凡社 昭和51年)、山口佳紀・神野志隆光校注『古事記』(新編日本古典文学全集1・小学館・平成9年)。また、倉野憲司『古事記全註釈 四』(三省堂・

昭和52年)も「雉の頓使」から天よりの使者の「雉」が発想されたと説く。

(5) 小島憲之ほか校注『日本書紀1』(新編日本古典文学全集2・小学館・平成6年)

(6) なお、『続日本紀』神亀二年九月二日の詔には、武丁の「雉雉之冤」の故事(注7)が引かれている。

(7) 『書経』「序高宗彤」。武丁(高宗)が始祖を祭る儀式をしていると雉が飛び来たり、祭具の鼎に止まって鳴いた。臣下はこれを災異であり、天からの王への謹告であると説き、王が政治を改めるきっかけとなった。

(8) 天鹿兎弓・天羽羽矢の地上平撥のための呪性については、拙稿「鹿の古代伝承と水神と」(『三田国文』30号・平成平成11年9月)を参照されたい。

(9) B伝に「大国主神の女、下照比売を娶し、亦其の国を獲む」とし、C伝には「多に国神の女子を娶」るとある。いずれも折口信夫の説く「いろごのみ」による王者としての支配を目指したことが記されている。

(10) 『本朝文粹』巻一・雑詩・字訓に清原真友源順の「字訓詩」が見られる。

(11) 世界言語としての漢字と個別の国の言語との関係性については、拙稿「報凶問歌」の「筆不尽言」と一字一首の歌と(『古代文学』47号・平成20年3月)に述べた。

(12) この点に関しては、津田博幸「文字思想と漢字文」(『国語と国文学』84巻11号・平成19年11月)に詳しい。また、文字起源論の持つ特質については西澤一光「歴史的制作物としての「文字」をめぐって」(『高岡市万葉歴史館紀要』18号・平成20年3月)が参考になる。